

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

第1回 大海原の王「大友宗麟」

時は今から約450年前の戦国時代。織田信長や豊臣秀吉などが天下人を目指していた頃、大分では、大友家第21代当主となった大友宗麟が豊後府内（現大分市）を拠点として東シナ海、南シナ海を舞台に活動していました。

当時の史料には、宗麟がカンボジア国王と外交関係を結び、巨大な船を仕立て、直接交易を行い、国王から「日本九州 大邦主」と呼ばれていたことが記されています。

これは、多くの大名が南蛮船や中国船の入港を待つといった受身的な姿勢であったのに対して、果敢に大海原に乗り出していたことを示しています。宗麟は、フランシスコ・ザビエルが日本を去る際にはインド総督やポルトガル国王への親書を託すなど、積極的な国際外交を行い、その優れた手腕により「大友宗麟」「豊後府内」の名声はヨーロッパの人々にも広く知れ渡ることになりました。

また、当時の中国沿岸には「倭寇」と呼ばれる人々が海賊行為、私貿易を盛んに行っていました。中国王朝はこの取り締まりの要請のため、豊後府内の宗麟のところへ使者を送ります。このことは、宗麟がシナ海や「倭寇」に対して大きな影響力を持っていた証拠であり、まさに「日本」の枠組みを超えた大名であったことを物語っています。



神宮寺浦公園に建つ「大友宗麟像」

市内勢家町にある神宮寺浦公園。春日浦ともいわれる付近一帯はかつて美しい海浜で、平安時代、近くに神宮寺が建立されていたことに由来しています。大友宗麟がこの付近の海岸を中心にポルトガルとの貿易を行ったといわれ、公園内には、それにちなんだ「南蛮貿易場跡」の碑とともに、陣羽織姿の堂々とした「大友宗麟」の像が、海に向かって建っています。